

## Aoyama Sapience

第39号



青山学院大学 文学部 英米文学科同窓会 会報

2018年7月15日発行

## ■ 巻頭随想 ■

変える勇気と変えられないものに耐える力、  
そしてそれを見極める知恵 アレン玉井光江

雨の中美しく咲くアジサイに魅せられる季節になりました。4月から英米文学部の主任に任ぜられ、日本有数の規模を誇る本学科の運営の大変さを体験している今日この頃です。

まずは同窓会の皆様方に学科を代表して感謝の意を表したいと思えます。皆様方のおかげで今年度より英米文学科3年生の1名に対して20万円給付の「英米文学科同窓会奨学金」をいただくことになりました。学生にとっては大きな励みとなります。心より同窓会に感謝申し上げます。

学科では昨年度から始めたPESEプログラムと通訳・翻訳プログラムの本格的な始動にむけて準備を進めています。2013年12月に文部科学省は「グローバル社会に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、抜本的な英語教育改革を進めています。日本における英語教育がグローバル化に向けてやっと本格的に動き始めたわけです。そのような中、我

が学科の卒業生たちが社会に出ても十分活躍できるように、また学生たちが自分の言葉として英語を使い切る力を獲得できるようにと我々も必要な改革に取り組んでいます。特にPESEプログラムでは専門科目の大半の授業を英語で受けることができ、日本にいても留学するのと同様の教育を享受できるようにと試行錯誤しているところです。

2045年のシンギュラリティ問題を抱える今、日本だけではなく多くの国々でこれからの若者そして子どもたちに必要な資質・能力とは何か、またそれを育むためにはどのようなシステム、方策が必要なのか議論されています。大変な教育課題ですが、私はどのような世の中になろうとも言葉によるコミュニケーション力を持つことが最も大切だと思います。「人はパンのみにて生きるにあらず」(マタイ福音書4:4)、言葉の獲得は母語、第二言語に関わらずその人



の魂に関わることだと思います。奇跡であり、恵みであるこの言葉のすばらしさを、我々は学生たちとともに深く理解、そして体験していこうと思っています。

最後にご存知の方も多いと思いますが、神学者ラインホルド・ニーバーの「平静の祈り」の一節を皆様方と分かち合いたく、ここに書かせていただきます。非力な私は悩むことも多くありますが、この祈りを心の糧に仕事をしております。

God grant me the serenity  
to accept the things I cannot change;  
courage to change the things I can;  
and wisdom to know the difference.

(英米文学科教授 学科主任)

## シェイクスピアから愛の花束を(1)

"Love is not love / Which alters  
when it alteration finds, / Or bends  
with the remover to remove."

(大意：相手の気持ちが変わると自分の気持ちも変わり、相手の思いが移ろえば自分の思いも揺らぐ、そんな愛は愛ではない。)

劇作家シェイクスピアは天性の詩人でした。40編に及ぶ芝居の他に、数冊の詩集を刊行しましたが、なかでも大作は154編の14行詩が収められた『ソネット集』。シェイクスピアの自伝的作品とは言い切れませんが、また一貫した筋があるわけでは

ないのですが、詩人本人の感情や経験に裏打ちされているのはたしかないように思えます。

その内容は、一言でいえば、愛の地獄。語り手の詩人が見目麗しい青年貴族を口を極めて称賛し、しきりに結婚を勧めます。その二人の友情(あるいは愛情か?)に謎の女性が割り込んできて、3人の間には不思議な三角関係が生まれます。ダーク・レイディと呼ばれる女性は青年と詩人の双方を手玉に取り、それはさながら劇の一場面のようにあります。

上の引用は「ソネット116番」の

一節です。愛することは信じること、と高らかに歌い上げている。詩であれ、芝居であれ、これほどまっすぐに愛の強さを主張するシェイクスピアを、私はほかに知りません。

シェイクスピアの描く愛の主人公たちは、だれしも疑念にとりつかれ、行く末について悩み、信念を失い、ときに誤った判断を下してしまいます。その人間的な姿は、少しも私たちと変わりません。『ソネット集』の語り手も同断です。それだけに、「そんな愛は愛ではない」といいきる竹を割ったような言葉に、心が洗われる気持ちになります。

佐久間康夫

比較芸術学科教授  
(’82年院修了)